

手外科温故知新Ⅶ： 手外科学会・ハンドセラピィ学会連携の重要性

上 羽 康 夫

日手会名誉会員、医療法人白菊会理事長

20世紀に始まった手外科は21世紀に入っても堅実に進歩を続け、それに伴ってハンドセラピィ(以後はHTと略す)も著しく進歩している。両者の発達時期や場所は必ずしも同一ではないが、両者が次第に融合した過程は学会の歴史や経過を振り返ると理解し易い。手外科を最初に始めたアメリカ合衆国では第二次世界大戦直後の1946年にDr. Sterling Bunnellなど軍人外科医が中心となりアメリカ手外科学会(ASSH)を設立したが、アメリカ・ハンドセラピィ学会(ASHT)は1975年にBonnie Olivett H.T.ら6人のハンドセラピストが手外科医の示唆を得て、学会を設立した。我国では1957年に天児民和教授(九大)らの整形外科教授が中心となって日本手の外科学会(JSSH)を設立された。他方、日本HT研究会は1980年には設立されていたが、学会ではなかったので日手会の重鎮である津山直一教授(東大)、田島達也教授(新潟大)らの示唆により奥村チカ子ら8人の理学療法士・作業療法士が中心となって学会創設を準備し、1989年(平成元年)に第1回日本ハンドセラピィ学会(JSHT)が北九州で開催された^{文献1)}。だが、当時は未だ日手会と日本HT学会は別々の会場で開催されていた。両学会が同時期・同会場で初めて開催されたのは、1992年第35回日手会と第4回日本HT学会が京都国際会館で開催されたのが最初であった。当時は、米国フィラデルフィア市トーマス・ジェファソン大学整形外科の2人の教授:James M. Hunter M.D. & Laurence H. Schneider M.D.と2人のハンドセラピスト:Evelyn J. Mackin P.T. & Anne D. Callahan O.T.が分担編纂して、1978年“Rehabilitation of the Hand 1st ed.”Mosby Co.を出版し、1984年には第2版も出版されて世界各国でハンドセラピィへの関心が大いに高まった時代であった。

米国ニューヨーク・コロンビア大学Prof. Robert E. Carrollのもとで手外科を学んだ筆者は1965年に帰国し、直ちに京大病院で勤務を始めた。Dr. Hunterや Dr. Schneiderは共にProf. Carrollの教え子であったので同門であり、兄弟弟子であり、一緒に症例検討会に参加したり、仕事をする機会もあったので、帰国後もHTには関心を持っていた。1970年より日本ハンドセラピィ研究会・学会の初代顧問であった田島達也教授の後を継いで、1998年から著者がJSHT顧問を仰せ付かった。当時から日手会と日本HT学会との連携を深める必要性を強く感じていた。2007年からは阿部宗昭先生がJSHT顧問となられ、日手会とJSHT学会との調整を諮りながら両学会の進歩・発展に尽力された(写真1)。

昨年は令和時代の幕開けであり、その年に「手の日:8月10日」が誕生した。日本手外科学会にとって2019年は格別の年であった。我国の手外科・HTは現代では世界に誇り得る知識と技術を持つと



写真1：平成時代のJSSH・JSHT連携メンバー：
左から：阿部宗昭MD、椎名喜美子HT、上羽康夫MD、小野敏子HT、櫛部 勇HT。

思う。しかし、両学会の連携の在り方にはまだまだ検討の余地がある。その連携について深く考える機会が昨年2回あった。初回は2019年6月17日～22日にベルリンで開催された第14回手外科学会国際連合 (IFSSH) と第11回ハンドセラピー学会国際連合 (IFSHT) 共催の学会に出席した折であり、2回目は昨年11月15日に日手会名誉会員でありJSHT顧問であった阿部宗昭先生が逝去された折であった。

ベルリンでの14th IFSSH & 11th IFSHT共催学会はドイツ人ばかりでなく、多くのヨーロッパ

手外科医・ハンドセラピストが学会運営に当たり、推定約2000人もの参加者が集まった(写真2-A)。冒頭の式典ではEUおよびドイツ国の手外科学会会長・ハンドセラピー学会会長が交互に登壇され、挨拶をされた(写真2-B)。学会場には大小様々な部屋が15近



写真2-A：14th IFSSH & 11th IFSHT
プログラム表紙



写真2-B：14th IFSHT & 11th IFSHT代表者と挨拶

くもあり、各部屋で発表・討論が並行して行われた。手外科の新手技とかHT新法などを発表する部屋も活発であったが、一番多くの人を集めていたのは手外科医・ハンドセラピスト合同研究の成果を発表した腱縫合後リハビリテーション法とか神経縫合法後の知覚回復促進法を発表し、討論する会場であった。そこでは、医師とセラピストが対等に発言し、討議していたのが印象的であった。展示場には手外科手術器具とハンドセラピー使用器具が陳列されていたが、それ以外にも我国で見たことのないSilent Auctionが設営されていた。手に関連する種々な物品がテーブルの上に並べられ、買いたい人が希望する値段を記入し、最終的には最高値を記入した人に落札されていた。手外科学会とHT学会との連携が至るところで目についた。その会場風景を見て、今後は我国でも手外科学会とHT学会もこのような良好な連携を持ちたいと念じた。

第2の機会は昨年11月15日に日手会名誉会員・日本HT学会顧問の阿部宗昭先生が逝去され、先生の業績を振り返った折であった^{文献2,3)}。彼が整形外科教授として医学・医療・教育の各分野で成された功績は極めて大きい。整形外科の中でも肘関節を含む手外科の発展には大きな役割を果たされた。若き日には近畿手の外科症例検討会の設立に関与し、第3回手外科学会国際連合(IFSSH)京都学会では委員を務められ、やがて日本手外科学会の種々の委員・役員を務められた。そして、平成7年に第12回中部日本手の外科研究会、平成9年に第9回日本肘関節学会、平成10年に第24回日本骨折治療学会、平成13年に中部日本整形外科災害外科学会、平成16年に第47回日本手外科学会などを主催された。

大阪医科大学では医学生、教職員、同門会員などの教育・指導に従事しながらハンドセラピストの育成にも情熱を注がれていた。1984年に米国テネシー大学に留学された阿部先生はその折にHTの重要性を再確認されたようだ。前述したProf. Hunterら編纂“Rehabilitation of the Hand”の3rd ed.翻訳にも尽力され、1990年に出版された津山直一・田島達也監修「ハンター 新しい手の外科—手術からハンドセラピー、義肢まで」、協同医書出版社の発刊に寄与され、我が国の手外科・ハンドセラピーの発展に大きな貢献をなされた。更に、大阪医科大学の作業療法士であった櫛部勇OT、谷村浩子OTらを積極的に指導・教育し、JSHT会長にまで育てあげられたのみならず、その後も藤原英子HT、西出義明HT、越後歩HTを初め数多くの優秀なハンドセラピストを育成された。その業績には唯々敬服するばかりである。ただ、このような偉大な業績が阿部宗昭教授業績録に殆ど記載されていないのは遺憾である。不必要な派手さを好まぬ彼の人柄を想い起させる。

20世紀中期の手外科は戦傷、交通事故、工場災害などによる手の外傷の手術治療に重点を置き、その後の機能回復はハンドセラピスト達に委ねるのが主流であった。20世紀後期になると外傷ばかりでなく、指再接着、Volkman拘縮、先天異常手などの知覚・形態の改善とADL改善を目的とする手術と手リハビリテーションが重視されるようになった。そして、21世紀のAI時代に入ると、手の運動・知覚・形態機能ばかりでなく、神経伝達能力や脳機能を含む手と脳との連合能力や社会的役割が重視されるようになった。コンピュータの過使用に伴う母指CM関節症や痙攣性手の予防と治療、先天異常手の精神的・機能的改善などが要求される時代となった。現代のCashless時代には手と脳との連合能力が当然必要となる時代である。言い換えれば、現代の手外科医は単に損傷組織Impairmentを修復する手技のみを考えるのではなく、治療によって患者の日常生活・社会生活がど

れほど改善できるかをも配慮しなければならない時代になったのである。手の機能障害に伴う人間のDisabilityやHandicapの課題に積極的に関与するのが手外科医の責務なのである。現代の手外科医にはハンドセラピストの協力は必須である。個人レベルだけではなく、学会レベルでの教育システムも必要な時代となっている。今年の東日本-、中部日本-、九州-手外科研究会は奇しくも同日の令和2年2月1日に開催された。第37回中部日本手外科研究会と第7回中部日本ハンドセラピィ研究会は出雲市で共催された(写真3)。現在では手外科学会とHT学会の共催は珍しくなく、手外科医とハンドセラピストとの交流も盛んである。しかし、手外科学会場にハンドセラピストの姿は多く見かけるものの、ハンドセラピィ学会場に手外科医の姿を見るのは稀なのが現状である。我国における手外科学会とHT学会の在り方をもう一度見直し、手の使用が不可欠である現代だからこそ、両者が一緒になって真剣に考える課題ではなかろうか。最も適切で効率的な治療法を開発して手の機能障害を極力少なくし、手の障害を予防する研究と普及には手外科学会・ハンドセラピィ学会のより良き連携が重要であろう。

末筆になりましたが、この原稿を書くにあたりJSHT資料を提供して頂いた第32回日本ハンドセラピィ学会長: 西村誠次教授、前JSHT事務局長:大森みかよHT、現JSHT事務局長:蓬莱谷耕士HTに深謝します。

文献

1. 権名喜美子: 日本ハンドセラピィ学会設立への途。ハンドセラピィ No.1、K.K.メヂカルプレス、pp.1-6, 1991.
2. 大阪医科大学整形外科学教室同門会会報No.25 (教室開講50周年記念特集号)、2002年5月25日。
3. 大阪医科大学整形外科学教室同門会会報No.33 (阿部宗昭教授退職記念特集号)、2006年3月25日。



写真3: 第37回中部日本手外科研究会・第7回日本ハンドセラピィ研究会プログラム表紙